
青の温度

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の温度

【Nコード】

N4903BA

【作者名】

ミナ

【あらすじ】

面倒なのにかわいい。会いたくないけど会いたい。幾つも転がる矛盾の中、交じり合って行く。恋愛願望ゼロの冷めた慧と、恋愛経験ゼロの熱いみどりの、じれったいプラトニックラブ（ラブになるまでにもかなり時間がかかります…）。「Home Sweet Home」のスパインオフですが、一応HSHを読まなくてもわかるようには書いているつもりです…つもり（汗）。

01（前書き）

HSHスピンオフです。

一応読まなくてもわかるように書いているつもりですが…つもりです（汗）。

都内のとある高級マンションの前。

デートの終わりに、礼儀として車で送ってきた慧（けい）は、帰るのを引きとめようとする女の仕草を冷めた目で見つめた。

今日あたりが潮時ではないかと、さきほどから勘が叫んでいる。

「ねえ、私、彼と別れようと思うんだけど…」

「どうして」

「どうして、って…慧とちゃんと付き合えたら、って思ってた通り」

思った通りの展開に、慧は小さく溜息をつく。

「……ごめんね。それなら、もう会わないよ」

「え、ちよつと…！」

まだ何か言い募ろうとするのに目もくれず、慧は運転席に乗り込むと、すぐに発進させた。

女が映っているだろうバックミラーは、交差点を曲がりきってしまいうまで見なかった。

かわいい子は嫌いじゃないし、綺麗なひとも嫌いじゃない。

けれど、いわゆる“女”は好きじゃない。

今別れたばかりの女のメモリを携帯から消去するのに、慧の気持ちは1ミリも動かない。

面倒なことは、嫌いだ。

どうせ、永遠なんて望めないのだから、面倒なことに首を突っ込んででも割に合わない、と思っている。

だから慧は、母親である妙からの見合い話を片っ端から撥ね退け、後腐れの無いほどのお付き合いしかしてこなかった。

そのくせ自分に乗り換えようとする女を冷やかに見ているのだから始末が悪いことこの上ないが、都合の悪い面に目を瞑るのは得意だ。そうやって厄介事には極力関わらず、32年間の今までの人生をそ

こそ上手くやってきたのだ。

これからもそうだと、疑いもしていなかった。

その時の慧は、少しだけセンチメンタルな気分だった。

二年前に亡くなった妹同然の従妹である唯（ゆい）の旦那だった男・

西岡 直輝にしおかなおきの恋愛相談に乗り、その上焚きつけてしまったのだ。

行き詰って落ち込んでいた直輝の背中を押すように、問題解決のために早退までさせたところだ。

間違ったことをしたとは思わないし、むしろ歓迎すべきことだとかわかってはいるが、どこか複雑な気分ではあった。

永遠を一度失った直輝が、再び大切な存在を見つけようとしていることが、唯の家族としては切なく、慧個人としては羨ましいと思う。羨ましいと思ってしまうのは、普段は目を瞑っているはずの、抱えっぱなしの矛盾が突きつけられるからだ。

永遠は無いと知っている。

けれど、どこかで永遠を望んでいる。

だが現実には永遠を望めない環境に身を置き続けている。

臆病なくせに貪欲に永遠を求めようとする直輝の姿に、本当に臆病なのは自分自身なのだと気づかされるのだ。

もやもやしたものを抱えながら、内科外来まで来ると、緊迫した空気が流れている。

受付カウンタでは、看護師の白井（しろい）と初めて見る女性患者が睨み合っていた。

背が小さいせいか、カウンタからようやく肩が見える程度の、しかも女の子と言ってよさそうな若い患者だ。

そうつと中に入ると、近くにいた看護師を捕まえて事情を聴く。

「どうかしたの」

「あ、四谷（よつや）先生、ちょうどいいところに。」

あの患者さん、どうしても西岡先生に、って言って。

白井さんが今は外してるって言ったんですけど、全然聞かないんですよ。

でも白井さんと張り合えるなんて、ある意味凄いですよね。竜虎相搏つ、みたいな……」

「ふうん……」

白井が竜で、あの患者が虎というところか。

まあ確かに、白井は年の割に頭が切れるし、言いたいことははっきり言う性格で、同僚と一部医師たちにも恐れられてはいる。だが竜虎相搏つとは言いすぎだろう。

「西岡先生今日はもう帰ったんだ。俺代わるから、あの患者さんも俺のとこ寄こして」

「あ、はい。わかりました」

まだ睨み合いを続けるふたりを尻目に、俺からしたらふたりともまだ仔猫みたいなもんだよ、と慧はひっそりと笑いながら診察室へ向かった。

初診時の問診票によると、患者の名前は鱸（すずき） みどり。

生年月日からするに年齢はまだ17歳、高校三年生だ。

堅物と言っているほど真面目な直輝と接点があるとは全く思えないそのプロフィールに、慧は首を傾げた。

しかし、白井と睨み合ってまで指名するとは、何か有るに違いない。名前をアナウンスして数秒後、診察室のドアが、壊れるのではないかと思えるほど勢いよく開いた。

慧はうつかり驚いてしまい、入ってきた患者―みどりをまともに見ることになった。

ちっこいな。

初見の印象は、それだ。

日本人男性の平均値よりも10センチほど高い慧からすれば大抵誰でも小さいのだが、みどりはその分を差し引きしても小さい。

しかも、感情がだだ漏れである。

みどりは、威嚇モードで毛を逆立てている猫のようなオーラを、全身に纏っていた。

慧の周りにはほとんどいないタイプのため、慧は思わずじっと見つめてしまう。

一方みどりは、慧の顔を見た途端に怯み、しかも観察されている事実に次第に戸惑ったような表情に変わっていく。

「座って」

椅子にかけるようにと慧が促すと、みどりははっとしたようにもう一度慧の顔を見る。

「あの、西岡先生は」

「どんな知り合い？」

みどりの質問に答えずに、慧が質問で答えると、みどりはむっとした表情をした。

慧は内心で、本当に直情型で感情がよくわかるな、とほくそ笑む。どうしようか迷っているらしく、ちらりと慧を窺うみどりに向かって、慧はわざとらしくため息をついてみせる。

「答えられないなら、診察しようか」

聴診器を見せつけて、暗に前を開けと脅しをかけてみる。

診察目的で来ていないなら怯んで口を開く気になるだろう、という慧の目論見通り、みどりは目を見開いて慧を見つめた。

「へ、へんた」

「医者に向かってそれは無いでしょ。」

そもそも、患者のふりして何かしにきた君は、営業妨害だし」

自分の言動の矛盾をわかってはいるらしく、みどりはぐっと言葉を詰まらせた。

だがそれで観念したらしく、みどりはおとなしく椅子に座ったが、今度は全身警戒モードでバッグを両腕で胸の前に抱えている。大きくて少しだけつり気味の目が、ますます猫っぽく見える。

「で、直輝とはどんな知り合い？」

“直輝”と言うことで本当に親しいのだとアピールしたのは、きちんと通じたようだ。

みどりは一気に警戒を解くと、静かに答え出した。

その変わり身の早さに、慧は内心で密かに笑う。

「私は、直接の知り合いじゃないです。バイト先で顔を見たことがあるくらいで。」

…私の幼馴染みの子が、……好きな、ひと」

“好きなひと”という言葉を出すのに時間がかかったのは、特に直輝に対して悪感情を抱いているせいだろう。

そして多分無意識に、直輝を、あるいは好きなひとという存在自体を認めたくないと思っているのだ。

その幼馴染みの子が、よほど大事ならしい。

「それで、直輝に何を言いに来たの」

「今はよく、わかりません」

素直な答えに、慧は小さく笑った。

直輝ではなく慧に会ったことで、沸きたっていた感情が少しは落ち着いたのだろう。

みどりは恐らく、本当に直輝に会っていたとしたら、徹底的に攻撃的な何かを口にしていただろうし、直輝はそれに潰されたと思われる。

今日、直輝を帰らせておいて正解だった。

「まあ、なんというか、直輝には俺も発破かけてやったし、…勘弁してやってくれないかな。」

ちなみに、これは純粋な好奇心なんだけど、その幼馴染みて、どんな子なの」

「有衣は、すごくいい子で、すごく優しくて、でも寂しがり屋で、傷つきやすくて…」

止め処ない。

みどりが延々語るのを聞きながら、唯と同じ名前だとか、その子も高校生なのだなとか、思うところはたくさんある。

けれど慧は、誰かについて夢中と言っても良いくらい語れるみどりが、少しだけ眩しく感じた。

ぎよつとしたのは、話しながらみどりの目からぼろぼろと涙が零れ出したからだ。

直輝の仕打ちがひどい、というようなことを訴え始めた頃から声の調子が怪しいとは思っていたが、まさか本当に泣くとは思っていなかった。

それも、多分本人は泣いていることに気づいていないのだろう、みどりは涙を拭おうともしない。

涙を武器と考えているような女は苦手だが、無意識に泣いてしまう女には結局のところ弱い、というのが男の常だ。

慧も例に漏れることなく、参ったな、と内心で苦笑を浮かべた。

「わかったから、ほら、泣かない泣かない」

言いながら、何がわかったのかわからないと思いつつも、デスクの上にあるティッシュを取って、そつと頬から涙を吸い取ってやる。

近づけた顔は、人形のように造作が整っており、涙を流す様は痛々しかった。

他人のために演技では無く泣けるみどりが、幼くかわいいと思った慧は、無意識にみどりの頭に手をやって撫でる。

特に意味も無くした仕草だったのだが、その瞬間みどりがかっと赤面したので、慧は逆に驚く。

だが次の瞬間、あたふたと慌てたみどりが後ろへ仰け反ったために反動で足が振り上がり、その爪先が慧の脛に直撃した。

「……」

反射的に手を離し、今更意味も無いのに足を庇う。

「ご、ごめんなさい！ あ、えっと、いろいろすみません、ありがとうございます！」

あ、とか言う暇も無く、みどりはわたわたとドアを開けて出て行ってしまった。

ちらと覗いていたみどりの耳が赤くなっていたことが、慧の表情を緩ませる。

良く知りもしない慧に対して話し過ぎたこと、泣いたこと、慧に頭を撫でられたこと、どれが赤面の一番の理由かな、などと考えておかしくなった。

「先生、顔があり得ないくらい崩れてますけど」

いつからいたのか、後ろからじととした目でこちらを見つめる白井が立っていた。

そんなに崩れていたかな、と足から離れた手で頬を擦る。

「いやなんか、かわいかったな、と」

「ロリコンですか」

「白井ちゃん、言葉の扱いには気を付けようね」

言いながら、いつも通りの自分が戻っていることに気づく。

先ほどまで抱えていたはずのもやもやしたものが、すっかり消え去っている。

言ってみれば、ただ自分の感情をまき散らしたただだったみどりだったが、もしかするとその素直さに助けられたのかもしれない、と思う。

「あ、今日のは点数付けないから、診察券だけ作ってあげて」「わかりました」

白井が立ち去ってから、みどりが座っていた椅子をもう一度見る。

お約束な学生手帳の落し物なんてものは無かったが、なんとなくそれを残念に感じた自分自身に、慧は妙なおかしさを感じた。

01（後書き）

プチ腹黒（？）な慧と、純情なみどりです。

今のところ、というかしばらくの間はべつに恋愛感情がお互い全く無い感じなんですけど…。

どんなふうにかップルになっていくのやら、少し心配ですが（笑）。
かわいがっていただけると、嬉しいです^^

世の中は、今までも決して色づいてはいなかったけれど、ここところなぜかさらに色褪せて見える。

誘いかけてくるような細い指先が、背中や腕に触れるのが、今は煩わしい。

「…慧」

微かに不満を滲ませた声で名前を呼ばれ、慧はようやく思い出したように隣の女を見遣った。

その瞳に自分と同じ翳りを感じるのは、わざわざ慧がそういう相手を選んで傍に置いているからだ。

それなのにどうしてか、ため息をつきたい気分に襲われるのだ。

またひとつ、矛盾がコトリと音を立てて転がる。

「なんだか、気もそぞろ、って感じね。何かあった？」

聡い女は嫌いじゃない。

嫌いじゃないのに、今はそれさえも苛立ちを覚えさせる。

慧は、ひとの気持ちを見抜くのは得意な方だが、自分がそれをされるのは、嫌いなのだ。

不遜だと認めつつも、踏みこまれるのは苦手なのである。

「悪い。今日は帰るわ」

慧の言葉に仕方なさそうに笑うその表情と、それでも何も言わずに速やかに離れる体温が、今日は妙に癢に障る。

無理に引きとめようとするような言動をされれば興ざめで、求めているものがそこにあるのに、一方で本当に求めているのはこれではないと思う。

矛盾だらけだ。

危うく本当にため息をつきそうになった瞬間、不意に脳裏に甦ったのは、つい一週間ほど前に目にした、みどりの泣き顔。

「…なあ、他のひとのために泣いたことって、あるか？」

「なあに、それ。心理テストか何か？」

呆れたように笑うところを見れば、自ずと答えはわかるというものだ。

実際、慧自身だってそんな経験は思い出せないのだから、似たようなものだ。

みどりの、あのわかりやすい熱に、中てられてしまったのだろうか。たった一度会っただけの、しかも一回り以上年下の高校生相手に、影響を受けているようでは自分もまだまだ甘い、と苦笑う。

純度の違いをまざまざと突きつけられたような感覚に苦々しい思いを抱き、慧は女に軽く手を振るとそのまま部屋を後にした。

家に帰った慧を待ちうけていたのは、さらに気の滅入るものだった。フロントで声をかけられ、渡されたのは小包。

差出人の名前―四谷 妙（よつやたえ）―を見ただけで、中身が何かわかってしまい、思わず手を引っ込めなくなる。

ずしりと重たく感じるそれは、何冊も入っている見合い写真だ。

妙は慧の母親で、気のない慧をせっつくように、こうして定期的に写真を送ってくるのである。

それも、直接だと慧が頑として受け取らないため、強行手段として宅配で送ってくるのだ。

こうまでされても、どうせ見ないことには変わりはないのだが、それでも親は親であるから無視もできない。

それに、多分妙は寂しいのだろう。

娘のようにかわいがっていた唯は亡くなり、実の息子である慧の嫁に期待したいのだろうという想像は容易い。

妙の持ち込もうとする見合いを全て撥ねつける慧に、それなら誰でもいいから誰か連れて来てみる、と怒られることも多い。

しかし当の慧としては、結婚など全く眼中にないため、単に頭痛の種となっているだけである。

慧からすると、人間が結婚をしたがるのは、あるいはさせたがるの

は、主に種々の安定性のためではないかと思う。

好きな相手と一生を共にしたいという気持ちは、強力な動機付けとはなるのだろうか、結局のところ単に付随するものに過ぎないだろう。

そして、それは同時に失うことへの恐れも植え付けるものだ。

少なくとも現時点では、慧を促す要素は無い。

時折、そんな自分自身を人間として欠陥品ではないかと疑うこともあるが、動かない心はどうしようもないのだ。

ようやくため息を吐き出すと、クロゼットの片隅に重ねられている開けないままの小包たちの上に、さらにまた新たな小包を重ねた。

発散できないものを抱えている時は、寝てしまいか、もしくは何かに没頭するに限る。

寝てしまふにはまだ早すぎる時間帯だったので、慧は新薬に関する研究論文を読むことにした。

それは、本当に偶然だった。

幾人か連名で書かれている名前の中に見つけた、“鱸”の文字。

通常英語で書かれている論文ではあるが、国内向けに日本語訳も添付されていたため、名前も漢字で書かれていたのだ。

今までは全く気にも留めていなかったが、思い返してみると以前に読んだ論文でも、同じ名前を目にしたことがあった気がする。

コンピュータを検索してみると、保存してある論文の中だけでも、何度が名前を見つけられる。

“すずき”という姓は珍しくも何とも無いが、同じ読みでも“鱸”

はかなり珍しい部類に入るだろう。

まさか、という気持ちと、もしかして、という気持ちが交互に浮かぶ。

名前を気にしてしまう辺り、やはりもう一度くらい会ってみたいという気持ちが自分の中にあるのだと認めると、慧は急に楽しい気分になった。

職業柄、製薬会社とはパイプがある。

昼の休憩時間や診療終了後に、空いた時間を狙って複数の会社からMRがこぞってやってくるのだ。

時に必死に営業をしに来る場合もあるが、大抵は顔繋ぎの意味もあり、ほとんど雑談で終わる場合も少なくない。

それを利用して、聞き込みをすることにしてみた。

論文は第一薬品工業のもので、連ねられていた名前を見た限りどこかの大学と共同研究という形ではなさそうだったから、幾らか分が良。

それに何より、“鱸”という漢字が珍しいため、最初の段階で振り分けができ、簡単だ。

「研究員でさ、鱸さんっていない？」

鈴の木じゃなくて、魚の鱸って書く人。けっこう論文たくさん書いてる」

「あ、はい。よくご存知ですね」

「まあ、たまたまね。漢字珍しいし」

「そうですよね。自分も、はじめて見ましたから」

「その人ってもしかして、娘さんいる？」

「はあ…、よくは知りませんけど。」

確か高校生の娘さんがいるというのは人伝に聞いたことがありま

すね」
一気に怪訝な表情になって慧を見るが、立場上何か言ってはまずい

と思っっているらしく、何も言っでこないのが笑える。
仲野医院を長く担当しているMRは、大抵そのうち病院の雰囲気

に合わせてかなり親しげに話してくれるようになるが、割と新しいMRはそうもいかないのだ。
かしこまって、鯨張って、多分これ以上の情報は引き出せないだろ

う、と踏んだ慧は一応この場は諦める。
前の担当MRに連絡してもいいし、ライバル会社に聞いた方が落ち

てくる情報もあるし、他のひとに聞けば良い。

我ながらキャラに合わないことをしているという自覚は、もちろんある。

こんな風に誰か特定の人間に興味を示すなど、慧の中では異常事態とさえ言える。

ただそれでも、なんとなく関わってみたいという気持ちがいっつこうに消えないのだ。

あの日、みどりは慧が既に忘れてしまった、またはもしかすると最初から持ち合わせていなかった何かを持っているのだと感じた。

それは慧に苦い想いを抱かせると同時に、清々しい想いを抱かせるものでもある。

それに、あの直情型の性格は、見ていて飽きないだろうな、と漠然と思う。

ずっと傍に置いておきたい、などと思う対象は今のところ誰もいないが、みどりがいたらいたで面白そうだ。

地道な、と言うには職権濫用すぎた感も否めない仕方で聞き込みを開始して二週間ほど。

第一薬品工業の鱸氏が、みどりの父親である可能性はほぼ100パーセントに近いことがわかった。

鱸氏はかなり家族を大切にしているタイプらしく、職場に家族写真がいつも置いてあるらしい。

肝心な娘の名前は出てこなかったため、確実なことはわからないが、写真を見たことのある人間から聞いた特徴は、ほとんどみどりと一致している。

思わずにんまりしてしまいそうになった慧は、表情を引き締めるのに苦労した。

あとは、仕掛けるだけだ。

変な言い方だが、病院からたとえ難題を突きつけられても、営業はよほどのことでない限り、NOとは言わない。

そして研究職の人間からすれば、営業がいるからこそ仕事が成り立つのであって、やはりよほどのことでない限り、NOとは言わないだろう。

今回のことにしたって、娘を大切にする父親なら多少躊躇はするだろうが、なにも取って喰おうというわけではないのだ。

だから、おそらくこの慧の要望も、案外あっさりと通るだろうという勝算はある。

「てわけで、ちょっと会ってみたいんだよね」

「はあ…あの、では、一度社に戻ってから、また連絡させてください」

「うん。よろしくね」

妙な要望を出された、と思っているのだろう。

冷や汗をかいて帰っていった若いMRをほんの少しだけ気の毒に思った慧だったが、こういうタイプほど無理が利くのだ、などとほくそ笑んでいたりもする。

さて、鱸氏はどう出るか。

彼の娘が本当にみどりだったとして、みどりはどう出るか。

みどりの反応を想像してみるだけでも、おかしい。

きっと、顔を真っ赤にして怒るか、あの大きな目で慧を睨むかするのだろう。

まだみどりだと本当に確定しているわけでもないのに、猫のようなみどりの様子を思い描いて、慧は小さく笑った。

02（後書き）

慧が動き出しました。

でも、恋愛感情からこのように動いているのではないのです。

好意は確かにありますが、それはまだ発展してはいません。

今のところ、みどりのことはマスコットの面白がって可愛がりたいだけなのです^^；

次回以降はみどり視点寄りも入りますので、話がだんだん動いていくと思います。

みどりが鱸家に生まれて、満17年と少し。

変わった苗字だと言われたことは星の数ほどあるけれど、それで特に良い思いをしたことも変えたいと思うような悪いことも無かった。しかし今はあえてご先祖様に問いたい。

なぜ、こういった理由で“鈴木”ではなく“鱸”を選んだのか、もしくは賜ったのか。

みどりは今猛烈に、この珍しい苗字が恨めしかった。

平日はいつもなら定時でなど帰らない父親が、珍しく早く家に帰ってきたのが事の始まりだった。

それだけでも普段と違うのに、今日はどうしてかみどりに対してちらちらと窺うような視線を寄越すのだ。

気になって食事も集中して摂れやしない、と問い詰めてみれば、帰ってきた答えはみどりの想像を軽く飛び越えたものだった。

「見合いしてみないか」

他にもいろいろと言葉を選びながら話してはいたが、要約するとつまりこういうことだった。

初カレもまだなうら若き高校生の娘に対して何を言っちゃってんのよ、とみどりは目を剥く。

「お相手もだな、いい人なんだぞ。お前、どこで見初められたんだろうなあ」

今時“見初める”なんて言葉を使うのはどうなんだ。

父親が娘に持ち出すにはあまりにもあんまりな話に、みどりは内心で思わずどうでもいい箇所につっ込んでしまう。

だいたい、高校生相手に見合い話を持ち出すような男のどこが“いい人”なのだ。

ほとんど啞然としてしまい、返す言葉も見つからず黙っているみど

りの態度をどう受け取ったのか、父親は早口で続きを話す。

そのお相手とやらは脳神経外科の偉い先生で、どこその病院の次期院長だそうである。

次期院長などという肩書きが付いているくらいなら、おそらく年齢もそれなりにいつているのではないか。

そんな相手に、どうして会わなければならないのか。

しかし、相手が病院の人間となると、話は少々厄介なのだ。

なぜなら、みどりの父親は製薬会社の研究員で、病院に対しては特に立場が弱いからである。

「お父さん、会社で頼まれたの？」

「う、その…まあ、そうなんだ。営業の若い人が、頼みに来てだなあ…。」

会うだけでもいいからって頭下げて、気の毒でなあ」

娘は気の毒じゃないのか、と言ってやりたいところだが我慢する。

いつもはみどりの交友関係に目を光らせているくらい溺愛型の父親なくせに、こんな話をするなんてそうとうな相手なのだろうと思っただからだ。

「…ほんとに会うだけだからね。でも、会ったらほんとにすぐに帰るからね」

渋々会うことだけ了承すると、父親は目に見えてほっとしたように息をついた。

「仲野医院って、名前は知ってるだろう？」

あそこはうちともけっこう大口の契約をしてくれてて」

聞き覚えのあり過ぎる病院の名前に、みどりはぴくりと反応した。

父親はまだ仲野医院についていろいろと話を続けていたけれど、もう頭に入ってきて来ない。

よりによって仲野医院とは。

名前を知っているところではない。

頭に血を上らせたまま襲撃まがいのことをして、しかも本来標的だった相手とは全然違う人の前で醜態を晒してしまったのだ。

診察の代金は請求されず、ただ帰りに診察券を渡されただけだったが、もう二度と行きたくない。

あの日の自分は、恥ずかしすぎた。いくら大事な幼馴染みのためとは言え、職場まで怒鳴り込みに行くこと自体、非常識である。

しかも初めて会った人を相手に感情を曝け出して、涙まで見せて、おまけに頭まで撫でられてしまうなんて。

思い出した途端に、あの瞬間の、優しい声と掌の感触が急に甦って、みどりは顔が熱くなるのを感じた。

性格が悪そうに見えるのに、けれどどこか優しくそうな面も見えた、あの男の名前は何だっただろうか。

できればもう二度と会いたくないし、忘れてしまいたいと思っているのに、名前を思い出そうとする矛盾に、みどりはため息をつく。

「それでその先生の名前はね、四谷先生というらしいよ」

さつきからずっと耳の中を素通りしていた父親の言葉が、意味を持つてみどりに届いたのは、その名前のせいだ。

あの日会った男のネームプレートに、“四谷 慧”と書いてあったのを、その瞬間思い出した。

まさか、と焦るが、会ったのは脳神経外科の先生だと言われたのだと思ひ至る。

内科の先生だったあの男とは違う人だ、とほっとした、その時だった。

「で、一応写真も預かってきたんだよ。ほら」

手渡された写真に、ちらりと興味なさげに視線を流したみどりだったが、顔を見た途端に思わず凝視する。

写っていたのは、紛れもなくあの日の男、四谷 慧だった。どうということだ。

あの日は確かに内科にいたのに、と思ったがすぐに、いやいや、今はそんなことが問題なのではない、と思ひ直す。

会社で頼まれたということは、病院側からコンタクトがあったとい

うことだ。

つまりこの場合、慧がみどりに会いたがっているという意味になる。

「…無理」

「え？」

「会わない！」

「ええ？ 写真見てダメって、どうしてだ？」

お父さんが言うのもなんだが、かなりカッコイイ男だぞ？」

それは、写真を見る前から知っている。

悔しいことに、確かに顔も造作もカッコよかった。

涙を拭かれ頭を撫でられたあの時、かなり接近していたのに、どアップに耐えられる顔だったのだから、間違いない。

けれど、それとこれとは別だ。

あんな醜態を見せてしまった相手に会うなんて、嫌だ。

それも、帰るときには靴の先で足まで蹴ってしまった相手だ、なぜ興味を示されるのかはつきり言って謎である。

まさかあれで怪我をしたとかは言うまい。

いい大人が高校生を脅すとも思えない。

そうすると、みどりに会いたがる理由がやはりまったくわからない。わからないだけに余計に会いたくない。

急に会わないと言い出したみどりに、父親は焦ったように縋りつく。

「みどり、頼むよ。営業さんが困ってるんだよ」

「でも嫌」

「みどり、営業さんはな、お父さんたちにとって神様みたいな人たちなんだよ」

「嫌だってば」

「お父さんたちが頑張って研究したものを、営業さんが一生懸命売ってくれてるんだよ。」

だからな、つまりだな。

みどりがこうして生活できてるのも、みんな営業さんのおかげなんだぞ。わかるだろ？」

「それはわかるけど。でも会いたくない！」

情けない父親の哀れぶった声はまだ聞こえていたけれど、みどりは聞こえないふりをして自分の部屋に逃げ帰った。

とは言っても、実際のところ選択の余地は無いのだ。

研究員は自社の営業には頭が上がりず、その営業は病院に頭が上がらない。

わかりきっているその方程式は変わることが無いのだから、みどりとしては父親のためにも会うしかないのである。

それにしても、どうしてみどりのことをいとも簡単に見つけ出してきたのだろうか。

その答えは、翌朝あっさりと判明した。

「どうも、お父さんの名前の出てる論文を読んでもくれたらしいんだよ」

研究者としては嬉しいのだろう、父親は幾らか顔を緩ませてそう言った。

その瞬間、みどりはわかってしまったのだ。

ここまで短期間でみどりにたどり着いたのは、苗字のせいだ。

もしも“鈴木”であったなら、決してみどりまでたどり着くことはできなかったに違いない。

そう考えると、みどりは自分の苗字を恨めしく思わずにはいられなかった。

医者という職業は、不規則で忙しい生活パターンであるらしく、会ったと決まったものの日程はすぐには決まらなかった。

そうこうしている間に、慧に出会う羽目になったもとの原因たち、つまり幼馴染みの有衣と相手の直輝はうまくまとまっている。

おめでたいことなのに、どうも釈然としない気持ちになったりしてしまつみどりは、今慧に会いたくないと思う。

慧は多分、人の気持ちを引き出すのがうまい人種なのだ。

だからこそ初めて会った時もするすると言葉を出してしまい、あげく泣いてしまったのだ。

今会ってしまったと、またあの日の二の舞になってしまう気がする。しかし、そう思った通りに運ぶわけではないのが人生なわけで、会いたくないと思っているその時に、日程はとうとう決定してしまった。

そしてみどりをさらに困惑させたのが、自分の行動だ。

会いたくないと思っっているくせに、会ったらすぐに帰ると決めているくせに、着ていく洋服をすぐに決められない。

ベッドの上に乱雑に重なっている洋服たちを見つめて、みどりはがりがりと頭を掻く。

「あーもうっ、わけわかんない！」

クローゼットの中身が空っぽになるくらい、ほとんどの洋服がベッドの上にある状態だ。

あれこれ組み合わせせて体に当てて鏡でチェックしてみたり、好きなひととのデートじゃあるまいし、と思考は批判的なのに、結局そうしてしまう。

その上最終的に選んだ服が、一番お気に入りのものだったとくれば、最早呆れるしかない。

「ばかみたい」

言いながら、それでも決定を覆せない理由は何なのか。

男のひととふたりで会うというシチュエーションが初めてだから。

そんなむちゃくちゃな理由を付けて矛盾を片づけようとしていると、階下からそろそろ時間だと言う母親の声が聞こえてきた。

いよいよ出陣だ、などとまるで侍のような気持ちになる。

鏡の中の自分自身を覗きこみ、気合いを入れるように両頬を軽く叩くと、みどりは思い切りよくドアを開けた。

03（後書き）

今回はみどりメインでした。慧に会いに行くまでの経緯みたいな。会いたくないのに、どこかで会いたいと思ってしまっ、みたいな複雑な心境なのです。

でも、恋ではないのです、しつこいようですが（笑）。

カッコイイ人に会うのに変な格好では行けないただのオトメゴコロですw

さ、次回は再会編です♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4903ba/>

青の温度

2012年1月13日18時01分発行